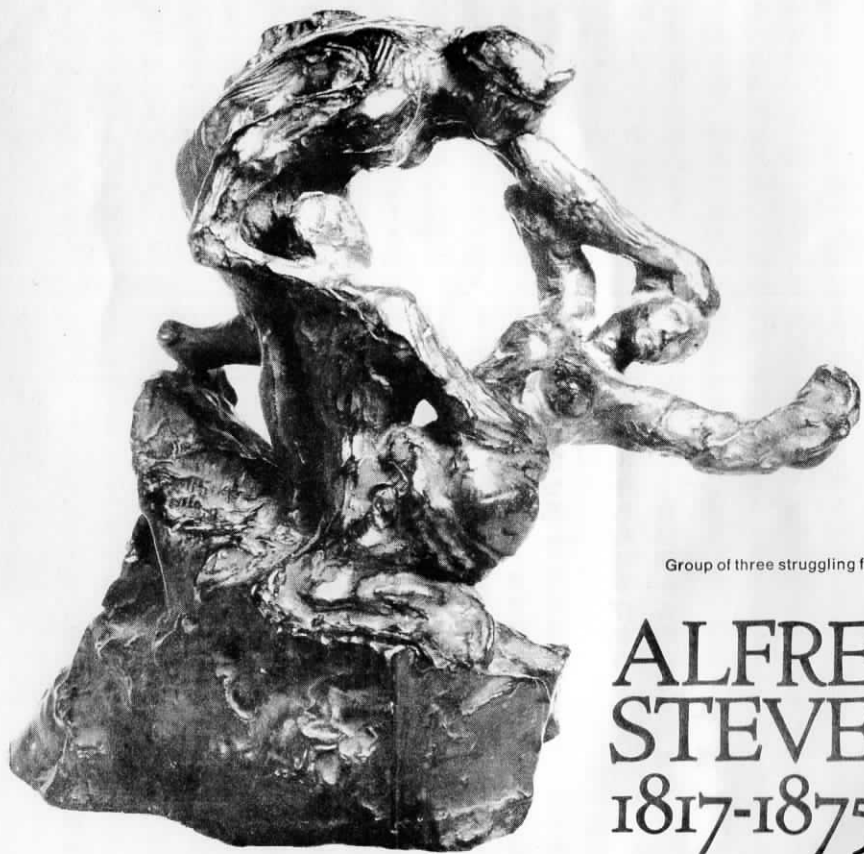


毎月一回15日発行 昭和50年 8月15日発行・第67号(昭和45年 9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

8月号



Group of three struggling figures

ALFRED
STEVENS
1817-1875

Libertaire VoL, VI, No 8

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和50年8月15日発行第67号

リベルテール

定価200円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1975年8月15日発行 VoL, VI, No. 8
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替東京133830番 三浦精一

今月のことば
三〇年目の八月十五日
タイへイヨウ戦争って知ってるかい
それがあんなの何んなのサ

——リリー・マルレーン——

クアラルンプール事件

私は暴力はいかん、政治は対話と
協調でなくてはいいかと申しあげておる。

1. 治安当局の思惑を越えて政治的措置が優先し
(司法権ノ独立ハドウシタドウシタ)
 2. 外圧に屈しましたことは(暴力ト権威ニ弱イ
ゾ弱イゾ)
 3. 時あたかも私が外国に便して国家の体面を考
えましたが(内ニカキアイセメグト
モ外ニ侮リヲ受クルナ)
- 福田副総理の指揮権発動により大過なきを得まし
たのは私の一身のみならず海外における日本の声
価を高めたと思ふのであります。

——三木首相架空談——

(三木首相靖国神社参拝)

内閣 三木

総理大臣と私人は

別人であります

——大義親を減す——

目次

巻頭言

アナキズム方法論 (2) 坂入純二 1

和田英さんこぼれ話 (4) ハギシン 8

海外だより 10

野火

特別寄稿

無政府共産党事件をめぐって

——自協側からの白井との対談——

江西 一三 17

抜けるような青空の下、巨大なB29の銀翼が旋回して行った。玉音放送があるという零時、雑音を通して聞き分けたのは「堪えがたきを忍び……」の一句だった。口惜しかった。只訳けもなく涙があふれた。イメージとしては胸毛を生したいかつい米軍捕虜が真白い粉をかぶって貨車に荷物を運ぶ図、青ぶくれに焼けたされた死体と焼跡、こげ臭い匂い、防空壕、駅頭で出会った先輩の海軍の夏服姿と短剣、英霊として帰って来た親類の大尉の軍刀だけの葬儀、一人息子の水兵を喪した伯母が半狂乱になって勲章をのしった言葉……切実な空腹。そのすべてが徒勞に帰したのだ。口惜しさはそれだったのだろうか？ 日本は精神力では負けなかった米国の物量に負けたのだ。教師はそう教えた。天皇に戦争責任はない。悪いのは東条を始めとする軍閥である。軍閥が満州を占領し、支那大陸に深入りして米国と戦端を開いた。南方はABCD包囲陣(米・英・支・蘭)で日本は石油や錫を押さえられ戦争せざるを得なくなったのだ……米英撃滅、鬼畜米英等死語になった言葉がよみがえる。その止めをさしたのが広島のパカドンだった。卅年経った今になって天皇に戦争責任があり(参照バガミニー著「天皇の陰謀」)南京の虐殺が判明し、三光作戦が、朝鮮人強制就労が、ソ連参戦による満蒙開拓民の悲惨な結末が、空襲の後遺症が……とりあげられている。戦争を知らない世代にとって天皇は象徴であり皇太子が沖繩で火炎ビンを投げつけられるのはどうかしているのであって、悲惨さの点では水俣病や複合汚染の方が切実ではないか、ましてや巨大企業の経済帝国主義はどうだ……すべてでは日本の国土の狭少と人口過剰が原因で上を見ても行きづまり下をむいても行きづまりこれでは欲求不満のイライラにからない方が不思議である。息をひそめて自室に引籠るのが自閉症なら、さしずめ爆弾犯人は自傷症なのだろうか？

「われ山に向い、高く眼をあげて問う。

わが××いづこより来たるか？」

一時の感傷と感激を強く自戒しながらなお問いかけずにはいられない。それが私の8・15である。

(莫空人)

アナキズム方法論 (2)

坂 入 純 二

価値と価格 (1)

1 アナキズム経済学は可能か

アナキズム経済学であると誰もが承認する経済学が存在するであろうか。そういう題名の、ないしはそれに類似した論文がいくつかあるようであるが、なかにはかなりあやしいものもあることは否定できない。そのなかでは以下にとりあげる邦訳論文が最もすぐれていることは首肯できる。それで、アナキズム経済学を検討するてがかりとして、主に「価値と価格」に焦点をあわせて、本論文とマルクス経済学における「価値と価格」を比較考慮することしよう。

周知のように、マルクス経済学は労働価値説をとる。アナキズムも社会主義の潮流の一つであることを前提にして、アナキズム経済学は「社会主義者の経済学だから労働価値説」というのであればそれは「まったく卑俗の常識」(宇野弘蔵氏)に起因する。まずこの卑俗の常識、予断と独断を捨てることから出発しよう。

かつてアナボル論争というのがあったという定説があ

るが、定説の例にもれず、疑問が若干投げつけられている。白井泰四郎氏の論文「『アナ・ボル論争』考」はその一例だが、この論争の内容と成果は純理的にそれほど大きな意義があったとは思われない。半世紀前の西欧における論争の日本版と評するのが最上級のレッテルである。

アナボル論争(現代用語でアナマル論争と呼ぶべきか)が最近全く試みられないのは、ボルの側にアナ克服の完遂というドグマがあり、アナの側に弁証法コンプレックスと経済学アレギーとがあるからであろう。弁証法と経済学に対する無知と畏怖からマルクス主義を単純素朴に憎悪する精神とマルクス主義に卑屈になる精神とが生ずると言っさしかえないであろう。

以下にやや詳細にみるブルードンの「価値と価格」論はマルクス『哲学の貧困』で読むよりはより正しくブルードンを伝えているのではあるまいか。これは仮定にすぎないが、私の力量ではこの仮定をもとにして論を進めざるをえない。それともう一つ残念なことに、延島氏の訳の専門用語にやや信頼に欠ける点があるのだが、これまた原文を全文入手しえなかったのでこの訳文を利用せざるをえなかった。

アナキズム経済学と称すべき経済学(少なくとも宗教

的ではなく科学的に承認しうる)が存在しないことは事実である。だが、もう一步原初的に踏みこんで考えるとき、アナキズム経済学は可能なであろうか、という疑問がある。この「価値と価格」でそれに解答を与えることができるであろうか。

(前述の宇野弘蔵氏の社会主義遍歴は大杉栄にはじまり、クロボトキン、サンジカリズムを経てマルクスであり、くだんのアナとボルとの「論争」という点ではもちろんボルシュヴィズムについた)わけである。後年、「アナ・ボル論争」というのは、経済学理論からすれば問題にならないでしょう」という質問に対して直接的に返答せず、「論争自体はわれわれにはそう関心を引かなかった。それにあの論争はわれわれのような運動の外部にあるものには大して影響を与えないものだったと思います」とややはぐらかして答えているのはアナ郷愁のなせるワザであろうか。アナボル論争の実体を知り、経済学へ関心を覚えるヨスガにでもと思い引用しておく。くわしくは宇野弘蔵『経済学を語る』(参照)

2 ブルードン経済学における価値と価格

格——J・ロビンソンに拠って——

ブルードンの価値論は『貧困の哲学』その他において述べられているようであるが、ここではブルードン経済

学の最良の解説書とされるロビンソンの著書『自由の経済学』に拠って解説することにする。(John Beverley Robinson "Economics of Liberty" 1916. 本書は延島英一氏によって邦訳され、『無政府主義経済学』として、平凡社版社会思想全集第二七巻に収録されている。私の利用したのはこの訳書である。)

価値という言葉には二つの意義がある。一つは「評価された対象の効用」を指し、「我々がそれを必要とすることに比例して、すなわち我々に対するその有用性ないしは必要としてそれを価値づける」という。他の一つは物の効用を全く指さないで、「物に対して支払われる貨幣価値」を指している。すなわち、もっと簡単にいうと、使用価値は効用であって、交換価値は価格であるという二つの意義をもつ。ただ価値という言葉によって現わされる観念が相違するだけでなく、その観念は全く相反しているのである。

この二つの対立的観念(効用としての価値と価格としての価値)をそれ自身の中に統一し、調和するところの価値のなんらかの一般的観念が見出されねばならない。そのために自足的な百人の生産者から成る一共同体を考える(図A)。

図AにおけるIは職業とそれに携わっている共同体の

成員数、Ⅱは各職業の平均生産物であるが、任意の数字である。

各成員は自分の使用のために保留される部分を除いて、その生産物を他人の生産物の相当部分と交換せねばならないこと、また彼が各生産部門における総生産物の100の平均量を必要とすることは明らかであるが、その100の平均量は各人の全取得分を、全生産物の100の部門に等しくし、すべての取得分を相互に等しくしたものである。

各人の必要も生産も相違するであろう。しかしながら各人は交換すべき生産物の一定の平均量を持つ故に、交換の平均は図に示すような結果を生じなければならない。すなわち平均して各生産者に対する全生産物の平等な分配である。

Vは、交換が物々交換によっておこなわれるものと仮定した場合の、相互に交換せられるであろう生産物の量である。もしある個人の生産物の全量が他人の生産物の全量と交換せられるものであるならば、たとえば百ブッシェルの穀物が12頭の牝牛と交換せられるものならば、なにか他の一つの商品が単位として用いられるときにも同じ比例が行なわれなければならない。だから仮に一ブッシェルの農夫の生産物を単位にすると、それは0.2頭の

牝牛または0.3冊の書物、2マイルの運送等々と交換せられることになる。交換における価値、つまり単純に価格といわれるものと対立するものとしての使用価値、すなわちもっと簡単に効用と呼ばれているものを構成しているのはこの他の商品の一定の、確立した比例に対する交換可能性なのである。

前述したように、価値は二つの意義を持つが、その第二の側面はⅤで示される。ここでは種々の品目の貨幣価格が一ブッシェルの穀物の価格が単位として取られている。もしⅤで一ブッシェルの穀物が、○・一二頭の牝牛と交換されたとすれば、一頭の牝牛全体では八・三三ブッシェルの穀物、すなわち八・三三ドルと交換されるであろう。以下、同様にして家屋、衣服等々の価格が得られるのである。ⅤとⅥの数字を比較すれば、それらが交互的であって、単なる顛倒によってどちらからでも他方が得られることがわかるのである。

Iで示される共同体によって必要とされる生産物の相対的総量、Ⅴで示される比例的交換量は生産物の効用の数理的標準であり、Ⅵで示される各生産物の一単位を購買するのに必要な貨幣の比例量は価格であるが、それは必然的に交互的である。

かくして、価値は効用と価格の両方を含んで、一つの

比例であることが分り、共同体の必要によって必要とされる生産物の量の比例的関係であることがわかる。価値が効用とみなされる場合には、Ⅱにおけるように、総体としての比例量によってはかられるか、Ⅴにおけるように、何か一つの生産物の部分あるいは倍数として測られた交換における同価の比例量によって測られる。価値が価格とみなされる場合には、Ⅵにおけるように、他の言葉で現わされた同一の比例である。(Ⅵにおいては、各生産物の単位の比例量が生産物の単位と比較して与えられている)。

以上の考察から、使用価値と交換価値のあいだの対立は、価値という言葉のなかに含まれてしまい、価値はこの両者を「楯の両面」とすることが理解されるのである。Ⅵにおいては、各成員が所得ないしは消費として受け取らねばならない各生産物の平均量、または同じことであるが、支出として支払わねばならない各生産物の平均量が示されている。これらの量はⅣの比例的部分にⅥの価格を乗ずることによって得られるのであるが、これらの量はⅠの種々の職業に身を委ねている成員の数と正比例している。この均等は、需要と供給によって実際に決定されるのは生産の各々の部門に従事する生産者の数であること、を導く。これが確定されると、価値は(効用

であれ価格であれ)確定されるから、急激にあるいは過度に高低の支配を受けなくなるのである。

このことは次の例示で明らかになる。Ⅰの道具製作者によって生産された道具の増加した能率によって裁縫師の生産物が倍加したと仮定する。(もしこのことが経済関係になんらかの適応をともなわないで起ったとすれば、裁縫師の剰余生産物は売られることができない)。結論は、いっそう少数の成員が裁縫に従事するということである。もし裁縫師の能率が倍加したならば、共同体の着用することができるとすべての衣類を生産するには、その半数の者を必要とするだけであろう。すなわち、8人のかわりに4人の者を必要とするだけであって、他の4人は自由にその他の附加的奢侈物の生産に従事することができるのである。

このことは図Bで示すことができる。図Bにおいても図Aと同じく成員百人の共同体が仮定され、図Aの裁縫師8人が裁縫師4人と奢侈品生産者4人とに分けられている。

8人の裁縫師が各自二〇着の衣服を作るかわりに、4人が各自四〇着をつくり、総量で一六〇着をつくるであろう。このことは共同体の各成員に対して一年の供給量として一、六着の衣服、すなわち、仮定した需要と同一

量を与えることとなる。しかも同一でありながら、その価格は以前の価格の半額である。だから、その半額分に相当する量を附加的奢侈品との交換にあてるわけであって、その附加的奢侈品の生産に裁縫から解放された4人が従事する。かくして、次のことが言われよう——ある生産物の生産に必要なとされる共同体の成員の比例数を減少することによって、その生産物の価格は、たとえそれに対する需要や供給が不変であっても、同様に下落するのである。

ところで、使用価値すなわち効用と、交換価値すなわち価格との一般的交互性はすでに指摘されているが、この交互性によって最も必要な生産物が最も安価で、比較的不必要な生産物が最も高価なのである。これらの交互的性質は図1で示される特別な例によって明らかになる。ここでは道具製作人の一人がその職業を変え、ダイヤモンド探求をその特別の職業とするということを仮定している。ダイヤモンド探求者の生産物は、かつて彼によって生産された15の道具に相当する。彼が一年間に一個のダイヤモンドしか発見しないと仮定すると、共同体の各成員はその一個のダイヤモンドの1/100の部分に対する権利がある(4)ことになるから、このダイヤモンドの1/100の価格は一ブッシェルの小麦、すなわち百ブッシェルの小

麦が一つのダイヤモンドに対する価格である。(根本的な生活必需品たる食糧の二年半分の貯蔵が一つの無益なかざり物に値いするのである)。こういった結果は、生産物に対する必要に比例する分業の不可避の結果である。なんらかの生産物が重要であればあるほど、それだけ多くの共同体の成員がそれに従事せねばならないから、他の生産物に交換され得る量、交換されなければならない量は、それだけ大きくなるのである。

交換される生産物に関して二つの注意すべきことがある。第一に、自由交換において生産物は同等の生産物と交換されるということである。(自由交換というのは、その行為において自身の利害に関しては自身の判断のみを指標として、自身の住む世界へ物質的制限にだけ服し、けっして他人の意志によって拘束されない人々の各々の間に生ずる勤労の交換のことである)。なぜなら、強制的原因の存在しないところであっては、何人も交換において、自分自身の一定量の生産物に対して自身が同量の努力をもって生産し得るものよりも少ない他人の生産物を受けとりはしないからである。たとえば、二人の農夫は二ブッシェルのニンジンと三ブッシェルのイモとで交換し、漁師と船頭は魚獲物を山分けする。取引をこのように最も単純な条件に還元することによってのみ勤労の

本質的平等性が明瞭になるのであり、以上の二つの例のいずれにおいても両当事者にとって単純かつ平等である。

しかしながら、もっと複雑な取引においては、殊に人々の考えが現在の人為的不平等に基礎をおいた制度によって歪曲されているから、平等性は自から明らかではない。だが、自由交換においては、粗野な仕事も穏和な仕事も同等の条件でもって交換されるであらう。なぜなら粗野な労働の生産物も穏和な労働の生産物と同様に必要だからである。

第二に、交換における労働生産物はその生産に要せられた時間によって測定されるということである。これは物質的生産物の交換に適用されたときには不分明であるが、勤労の直接交換に適用されたときには自から明らかである。二人の人間、農夫と大工をとりあげてみる。彼らは他人の労働するのをみて、相互に交代して助けることに一致し、大工が農夫のために一日働き、農夫が大工のために一日働くことになれば、交換は必然的に同一時間の勤労の基礎の上に行なわれる。(正気で最低額の賃金で働くことを余儀なくさせている複雑な原因から解放されているものであれば誰でも、彼のために他人の働らいた日々の労働の報酬として他人のために働らくことに同等することはしないであらう)。だが、時間単位

の必然性ができるのはこのような最も簡単な場合だけである。そしてこのことの根本的真理はこのような初步的な例、ことに勤労の直接交換の例の上に支持されなければならない。職業の性質におけるこのような変異の多様性のために、もっと複雑な労働の場合における直接の比較が不可能なのである。たとえば、外科医は読書や研究に要する時間、臨床講義への出席、外科医の仕事の過度の緊張後の休息などは、その全労働日と比較して彼の労働の実際の時間測定法を非常に短かなものとする。同じ見方をして、オペラ歌手はすべての練習や下稽古や休息などは短かい夜の時間に行なわれるかのごとくに見える歌手の勤労の一部分なのである。

勤労が実際にそれ自身を還元するものは、時間に対する時間の勤労、日に対する日の勤労の交換ではなくして、一生に対する一生の交換なのである。解放された状態から離れているために、今日のところ、人々は非常に相違した事情、すなわち最も体力を疲れさせ、最も生命破壊的な職業のあるものが最も悪い支払いを受けているのを見るのである。だが、このようなことは労働者の部分的奴隷化によってのみ可能なことなのである。現在においても、人類は無意識的に労働の一生という標準に訴えているのであるが、それは本能的にであって、完全な意義を

理解してのことではない。解放された状態は過去にも存在にもない。だが、世界はそれを目ざしており、今はたぶんその目標の視野に入っている。

和田英さんのこぼれ話 (1)

ハギシン

関東大震災時の戒厳令は解除されたが、ひきつづき東京警備指令がしかれた。労働争議にも憲兵がやってきた中小企業は震災で大打撃をこうむり、賃金が払えなくなったので、ストライキが多かった。

翌年のメーデーはダメだろうといわれていたが、和田は延島英一、ヤマケン（山本懸蔵）と相談して、開催することにした。友愛会が労働総同盟となって鈴木文治の席がなくなっていた。松岡駒吉がきて、「メーデーの司会は鈴木に花をもたせてやってくれ」といった。だが、準備会になると彼は「鈴木は辞退したから、正進会か信友会から出してくれ」といった。東京警備司令部から総同盟に「第五回メーデーの司会者がきまったらすぐしらせろ」といつてきたので、鈴木は尻ごみしたらしい。今度は司会者が殺られるかも知れぬ、と皆思っていた。年長の和田が司会にきまった。官房主事に届けに行つて、ついでに歌の許可ももらった。何と禁止されていた「赤旗の歌」がスナリ公認された。和田は当時、本郷の労働運動社に泊りこんでいた。すぐ前に特高の大小屋が建っていた。和田は村木源次郎に三〇円もらつて、メーデー

I		II		III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
職 業		各個人の一の生産物		一年の総生産物 (I×II)	共同体の各成員の取分 ($\frac{III}{IV}$)	他の生産物の項における交換可能性 ($\frac{V}{VI}$)	貨幣価値 ($\frac{VII}{VI}$)	各成員の所得額 (IX×VII)	総生産物の価格 (IX×VIII)	
農 業	夫 妻 39人	穀 物 100ア	3900	39.00	1.00	1.00	29	3900		
畜 産	夫 妻 13人	牛 乳 12頭	156	1.56	0.12	8.33	13	1300		
大 工	夫 妻 9人	木 屋 2軒	18	0.18	0.02	50.00	9	900		
織 造	夫 妻 8人	服 20着	160	1.60	0.20	5.00	8	800		
縫 製	夫 妻 12人	靴 15挺	180	1.80	0.15	6.66	12	1200		
金 工	夫 妻 3人	輪 30脚	90	0.90	0.30	3.33	3	300.8		
印 刷	夫 妻 14人	送 200マ	2800	28.00	2.00	0.50	14	1400		
運 送	夫 妻 2人	術 6回	12	0.12	0.06	16.60	2	200		
医 生	夫 妻 100人							10000		

I		II		III (I×II)	IV ($\frac{III}{IV}$)	V ($\frac{II}{III}$)	VI ($\frac{I}{II}$)	VII (IV×VII)	VIII (III×VI)
職 業		各個人の一の生産物		一年の総生産物	共同体の各成員の取分	他の生産物の項における交換可能性	貨幣価値	各成員の所得額	総生産物の価格
農 業	夫 妻 4人	衣 服 40着	160	1.60	0.40	2.50	4.00	400.00	
織 造	夫 妻 4人	衣 服 20脚	80	0.80	0.20	5.00	4.00	400.00	

I		II		III	IV	V	VI	VII	VIII
ダイヤモンド探査者		ダイヤモンド 1個		1	0.01	0.01	100	1.00	100.00

1当日まで一週間、大阪に身をひそめた。メーデーは赤旗の歌を大合唱しながら、無事に終った。この年が検束者は一番少かった。

信友会は欧文工が主だった。腕がたつし、代りがいないから、クビになる心配がない。安心して闘えた。尖鋭化した理由もここにある。のちに和文工が入ってきた。

文選工の平野重吉（小剣）も入った。小石川労働会と一しょによく闘ったが、のち普選運動に転じ、政友会院外団に加わった。正進会の新聞ゼネストのとき、和田は万朝報にいた。万朝だけが八時間制をかちとった。八時間二部制を実施するには、三割増員すればいい、と計算したからだ。このときの闘争惨敗宣言を桑練（桑原練太郎）が大杉に頼みに行ったという伝説は誤りだ。和田と諏訪与三郎が行ったのだ。桑練は会合のときはしきりに勇ましいことをいうが、気が小さくて、ガサ入れがあるとビクビクして逃げまわっていた。目玉が大きく、ドモリで年として淋病をしょいながら女郎屋に通っていた。和田もバクチと女郎買いは人後に落ちなかった。流連しながら工場に通ったこともある。

新聞といえば、帝国ホテルの近くに東京毎日新聞社があった。藤田勇が社長だった。一面下三段に大杉が、過激社会運動取締法案反対の記事を書いた。12ボ位の活字

で刷った。和田と近憲が刷上りを持って、神田青年会館の中野正剛演説会で撒いた。蛇投げ事件の椿が手伝った。

この新聞は残っていないようだが、或いは藤田の義侠心で、適当なだけ刷ってあとは組替えたのだろうか。

大杉、近憲、平岡誠、和田らが高尾山へ運動会（遠足）に行つた。桜の杖を売っているのを大杉が、「こういう物はいつか必要になる時があるよ」と買って、皆に一本づつ与えた。この杖は大和民労会へなぐりこみのとき役に立った。実業の世界の野依秀市も面白い男だった。

十円札をコヨリにして十本位、鉢巻にさして印刷所にきかした。「俺の原稿を今夜中に刷ってくれば、みんなにこのコヨリをやる」といつて、印刷所にはあまり支払わず職人に自分の仕事を優先的にやらせたりした。

有島と情死した波多野は大女で、十文位のタビをはいていた。いつも有島にびったり寄りそっていた。……

お知らせ

十月十二日、東京都豊島振興会館において「リベルテール読者の会」を開きたいと思ひます。次号にくわしく書きますのでよろしく願ひします。